

(PDF版・3の17) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」 (115-231頁)

「一 神の用意」

起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「聖書の内容」(「聖書的証言の内容」)——詳しく言えば、「自己自身である神」としての「父なる名の<内>三位一的特殊性」・「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神(「神の顕現」)にしてまことの人間(「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」)である「イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちのイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」は、「ただ一つの証言を形造っているのであって、それは、厳格に排他的に、ただひたすら……イスラエルとの契約の中で、またこの契約を基礎づけているイスラエルのメシアの約束、したがって神の言葉の受肉〔すなわち、キリストにあっての神としての神のその内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉〕とすべての肉に下る聖霊の注ぎによる約束の成就の中で起こった神の恵みの啓示についての証言として理解されなければならない〔換言すれば、神のその都度の自由な恵みの神の決断による客観的な「存在的な<必然性>」——すなわち、客観的な「その死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」<と>その中での主観的側面としての主観的な「認識的な<必然性>」——すなわち、その「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」・「キリストの霊である」「聖霊の注ぎ」による主観的な「信仰の出来事」を前提条件とするところの、主観的な「認識的な<ラチオ性>」——すなわち、徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性を包括した客観的な「存在的な<ラチオ性>」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の第二の存在の仕方における神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している起源的な第一の形態の神の言葉で

あるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な実在」）の関係と構造（秩序性）の中での証言として理解されなければならない。Ⅰコリント3・10-11、エフェソ2・14以下）。このような訳で、区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」（「神の本質の問題」）を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」（「神の存在の問題」）を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「われわれは、すでに、直接的に神ご自身を啓示されたのではなく〔換言すれば、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」ご自身を啓示されたのではなく〕、換言すればご自身の中で存在し給う神そのものを指し示しているような聖書的証言の要素は存在しないということを見た」。

「神が神としてご自身の中で存在し給うということはもちろん神の啓示を支えている力である」が、「しかし、聖書的証言は、あくまで〔イエス・キリストにおける神の自己〕啓示の中での神〔すなわち、「第一の問題」である「神の存在の問題」に関わるところの、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為、行動、外在的本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事<全体>）における神〕を指し示しているのであり、ただそのようにして……ご自身の中で存在し給う神〔「第二の問題」である「神の本質の問題」に関わるところの、「自己自身である神」としての「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」〕を指し示している」。すなわち、第二の形態の神の言葉である「聖書的証言」は、「あくまでも神の啓示について証しする」という「ただそのようにしてだけ、神ご自身について証しする」、また「聖書的証言は、……啓示を通り過ぎて〔啓示を後景へ退けて、啓示とは独立的に〕<宇宙の中での人間>を指し示さない」。したがって、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神として神の啓示を後景へ退けた、その啓示から独立した「宇宙の中での人間が、「傍系的な線〔換言すれば、「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明〕において問題である」。起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」、「神の業の<衣>、<殻>、<特定ノ外形>」）であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉（「最初の直接的な第一の啓示のくしるし>」）である「聖書的な証言」は、類的機能を持つ自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間の観念的生産物としての人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」についての証言

ではなく、それ故に「人間的な思想の形においてであるが、すべての人間的な思想を超えた」ところの、「イエス・キリストの中で神が人間と出会い給う出会いの出来事についての証言である」、聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の特別啓示としての「神の啓示についての証言である」。したがって、「もしも聖書的証人たちが、その啓示の中での神の主権的な恵みと並んでなおまた宇宙の中での人間が独立した形で神と結ばれていることについて教える自由を持つとするならば」、「その時、まさに彼らはそのことでもって、自ら啓示の証人であることを否定することになるのである」、また「その時、彼らは、啓示と関わるにも拘らず、あたかも人間の体系的な原理と関わっているかのように関わっているということになるのである」、またその時「彼らは、……〔包括的に言えば、そのような『自然』神学の<段階>で思惟し語っている〕自分の正体を暴露する」ことになるのである、それ故に「その時、それとしての聖書的な『主要な言明』〔主要な線、『<非>自然』神学』的な言明〕そのものが、……虚言となってしまう」。第二の形態の神の言葉に属する「預言者と使徒たちは、人間として、人間の〔類的機能を持つ自由な人間の自己意識・理性・思惟の〕偉大さと〔誤解し誤謬し曲解するという〕不幸とに、ほかの人間の場合と同じようにあずかっているのであり、決して人間の偉大さ不幸から例外的に免れていたわけではないとしても、彼らの証言は、彼らおよびすべての人間と共に人間の偉大さと不幸にあずかっている対象〔あの人間的な自然としてある人間の観念的生産物、人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」〕を証ししているのではなく」、第二の形態の神の言葉である「自分の証しの対象〔すなわち、「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」の対象〕、自分の証しの起源である」ところの、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身——すなわち、「自分自身と矛盾しないし、また彼らに対しても彼らがそれについて語らなければならないことの中での自分と矛盾することを許さない対象を証ししているのである」。したがって、「われわれの側としても、〔Iコリント3・10-11、エフェソ2・14以下からして〕、そのような対象の証人としての彼らが語ることを聞きたいと願うならば、……彼らはまさに一つのことを語ったということ、ただ一つのことだけを語ることはできたし、語ろうとしたということ、換言すれば承認された聖書的な『主要な言明』〔主要な線、『<非>自然』な神学』的な言明〕の内容を形造っていることを語ることはできたし、語ろうと欲したということ、堅くとして離してはならないのである」。このような訳で、すでに述べてきた「聖書的なあの副次的な言明は〔「傍系的な線」、「『自然』神学』的な言明は〕、それとして、またそれらの言明によって提示されている問題は、そのまま看過されたり抑圧されてしまうことはできないとしても、……副次的な言明は〔「傍系的な線」、「『自然』神学』的な言明は〕、『主要な言明』〔主要な線、『<非>自然』な神学』的な言明〕を否定せず、それどころかただ『主要な言明』

を強調し確認するだけであろうということ以外にことをはじめから期待することはできない……。「その時、そのことは、……自然神学への招きと要請は、換言すれば自然神学を基礎づけ・可能にし・正当化するであろう聖書的な教えは、あの副次的な言明〔「傍系的な線」、「『自然』神学」的な言明〕の中ででも存在しているということはあり得ないということの意味する……」——「この原則的な考察が正しいということは、……われわれが聖書そのものをしてあの副次的な線〔「副次的な言明」、「傍系的な線」、「『自然』神学」的な言明〕の上で語らせる時に、確認される……」。

さて、第二の形態の神の言葉である預言者および使徒たちの「**聖書の証言**」は、「<どこからして>指し示されているのであろうか」——「それは、聖書の証人たちに、神の啓示についての証人としてのその唯一の委任の中で、唯一の委任と共に与えられた全権と責任からしてであって、決してそれ以外の全権と責任からしてではない」。したがって、「ただそれとしての啓示証人の一つの唯一の全権と責任からして、あの聖書的な傍系的な線〔「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明〕の上で語られることが語られ得るのである」。「人は、いかにパウロが、繰り返し伝道者として、また彼の教会の指導者として、まさにイエス・キリストの使徒として、自分に委託され課せられたこと以外の何かを語ったり、語らなければならないことがないよう用心していたかを知っている」——「わたしはイエス・キリスト〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における第二の存在の仕方（子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」）イエス・キリスト〕、しかも〔復活に包括された〕十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心した（Ⅰコリント二・二）」、パウロは「また、ローマ人への手紙一―二章によれば、宇宙の中での人間について知っていたことを、……明らかに……**ただ**〔復活に包括された〕**十字架につけられたイエス・キリストから知っていた**」。旧約聖書においても、「詩篇作者たちが知っている神は、イスラエルの神〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における起源的な第一の存在の仕方（父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）〕、出エジプトと荒野を通り抜けた際の主、律法の与え主、ダビデの希望、その知恵、その力、そのいつくしみ、その義、起源的に完結的に全くただこの神だけである。また詩篇作者たちがあの傍系的な線〔「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明〕の上で何を語ろうと、とにかく彼らはそのことをくそこ

からして>、<この>神、決してその<ほかの>神ではなく、<この>神についての彼らの知識を展開し適用しつつ語っている」。

そのような訳で、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「聖書の証人たちは」、「彼らが語りかけている者たちに対して〔彼らが語りかけている「聞き手および読者」に対して〕、「キリストにあっての神としての」神についての可能な知識の別な第二の源泉を示すために……なしていることはあり得ないということについてはすでに決定が下されている」が故に、「**聖書の証人たちは、あの傍系的な線**〔すなわち、あくまでも「主要な線」、「主要な言明」、「『<非>自然』的な神学」的言明に包括された「傍系的な言明」、「『自然神学』」的な言明〕を<どこを目標に>してひいているのか」、それ故に「**彼らは、宇宙の中での人間を示しているのか**」ということに対して、「**彼らは、自分たちの全権と責任に従って由来してきたのではないところへと、ほかのものものたち〔「宇宙の中での人間」〕を指し示そうと欲することはできない**」。したがって、「聖書の証人の聞き手および読者に対して、彼らから要求されている〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的なく必然性>」とその中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性>」、すなわち「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で贈る与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識（啓示信仰）、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事としての〕信仰に関して、……第二の確信の可能性、宇宙の中での人間がそれとして持つことができる確信の可能性を指し示すことによって基礎づけられたり、強められたりするといった具合ではあり得ない」。しかし、「積極的なことの方に注意を向ける」時、全世界としての第三の形態の神の言葉に属する教会自身と世に現存する「ほかならぬ宇宙の中での人間こそ」が、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的なく必然性>」とその中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性>」、すなわち客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストにおける「啓示の出来事」とその「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「キリストの霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で贈る与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識（啓示信仰）、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事の中で、第二の形態の神の言葉である「聖書の証人たちの使信と、彼らの使信の彼岸において〔起源的な第一の形態の神の言葉としての〕神の啓示そのものが関わって来るところの者である」。「**神の啓示が宇宙の中での人間に<関わって来る>ということ、どのように<関わって来る>かということ**——「このことは、**必然的に彼らの使信のすべてを規定する**」（Iコリント3・10-11、エフェソ2・14以下）、「**本来的な支配的な内容であって、われわれが聖書的な『主要な線』**〔「主要な言明」、「『<非>自然』な神学」的言明〕と呼んだところのことである」。その「啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>を持ってい

るイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「神の啓示と直面させられている宇宙の中での人間は、彼がそのことに気づくはるか以前に、神の啓示がその人間にとって決断となるはるか以前に、またそこでの決断がどう下されようととにかく、神の啓示と直面させられた者として、客観的に別な人間となるのである」。「ここで、例として、I コリント七・一四によれば、異教徒の夫はキリスト信者の妻によって、異教徒の妻はキリスト信者の夫によって、子供たちはキリスト信者の両親によって『きよめられている』ということが思い出されてよいであろう」。

第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別「啓示は、真理である、すなわち神の真理である。しかし、その啓示は、それと共にまた、〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」）であるイエス・キリスト自身を起源とするその「最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の实在」としての第二の形態の神の言葉（「最初の直接的な第一の啓示のくしるし>」）である聖書の中で証しされて〕宇宙の中での人間の真理である」。したがって、「聖書的証人たちは、I コリント3・10-11、エフェソ2・14以下からして、「そのことの中に含まれた形で、……宇宙の中での人間の真理について証しすることなしに、……神の真理について証しすることはできない」。「もしも聖書的証人たちが、人間に対して、人間は決して見知らぬ<主>と関わるのではなく、ほかならぬ自分自身の主と関わらなければならず、新しい<主>と関わるのではなく、彼の永遠の<主>、彼の時間全体をそのみ手の中に保ち支配し給う<主>と関わらなければならないということを証ししないならば、どうして彼らは神の啓示を、それが現にあるところのものとして、すなわち人間に向かってみ力をもって働きかける神の介入として宣べ伝えているであろうか」、「もしも彼らが、人間に対して、神の啓示を宣べ伝えるならば、彼らは、人間自身を、啓示の出来事を通して客観的にすでに変えられた人間として要求しなければならない。まさにこの最後のことが出来事となって起こるならば」、詳しく言えば「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて、「イエス・キリストが、われわれ人間に対して、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書および〔その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である〕教会の宣教を通して同時的となる時と所、『神われらと共に』が神ご自身によってわれわれに語られるところにおいては、われわれは、神の支配のもとに入ることを承認し確認する。世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として承認し確認する。自然の光の中でではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求、判定〔裁き〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身

の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを承認し確認する」（『教会教義学神の言葉』）ということが出来事となって起こるならば、「そこで聖書的な傍系的な線〔「副次的な言明」、「『自然神学』」的な言明〕が発生して来るのである」。このような訳で、「われわれは、〈何を目標〉に聖書的証人たちは、宇宙の中での人間を指し示しているのかというわれわれの問いに対して」は、「神の啓示を、その受領者に向けての必然的な、是が非でも強いて来る方向づけと関連づけの中で解釈するためである、と答える」。したがって、「われわれは、〔「受領者の現実存在が立っている最も本来的な最も起源的な権利は、まさにその啓示の中で受領者の現実存在を要求し給う神が持ち給う権利であるが故に、……受領者の現実存在は、啓示の主張から決して不当に身を引くことができない現実存在である」ことからして、〕そのような傍系的な線〔「副次的な言説」、「『自然神学』」的な言明〕が、まさに〔キリストにあっての神としての神の特別〕啓示そのものとは別なところからひかれていないということをおくまで堅くとって離さない」。「宇宙の中での人間は、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書の中で語りかけられており、まさしくもって〔イエス・キリストにおける神の自己〕啓示から〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕啓示そのものへと戻るように指示されているのである〔すなわち、その「啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っているイエス・キリストにおける神の自己啓示から身を引いて行くベクトルを持つ「傍系的な線」、「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明から「主要な線」、「主要な言明」、「『〈非〉自然』な神学」的な言明〕へと戻るように指示されているのである」。「われわれは……ここで、特に……はっきりと傍系的な線〔「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明〕の動きの中で語られている詩篇三六・一〇が思い出されなければならない……」——「われらはあなたの光によって光を見る」。このような訳で、「直接それに先行する創造主の讚美の中で、また表向き最も純粋な「自然詩篇」の中でも……その抽象的な存在と具体的姿をもった存在の中での天と地に向かって直接方向づけられ、それらによって養われた黙想と敬虔な思いが、まさにその思惟と予感に向かって開示される天と地の秘密を、それと共に最後的には自分自身を宣べ伝えるべく語って来るということについては何も語られ得ない」。それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、現存する人間のその存在・その思惟・その実践はその時代と現実に強いられている限り、「問題となってくる詩篇と詩篇の箇所の心理学的・時代的な形式がそのような黙想と敬虔な思いの領域に含まれていること、そのような黙想と敬虔な思いがそれらの詩篇および詩篇の箇所で、いわば手を加えられて洗練されたものとなっていること、部分的にはバビロニアとエジプトの神話の敬虔性に依拠しつつ洗練されたものとなっていること、そのことは看過されたり否定されてはならない」、「また、詩篇の作者たちは、よく知られた星空を直接観察し、よく知られた雷鳴のとどろきに聞き耳をたてたのである」。「詩篇の作者たちは、それについて語

ろうとした時、イスラエルの高い文化水準を保っていた隣人たちのあらゆる種類の光の神々と悪魔について詩作し語るのを聞いたことを利用した」。

聖書によれば、「宇宙の中での人間」は、次のような人間である——われわれは、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、「〈神の選び〉〔「恵み」〕をイエス・キリストの〈復活〉〔「生」〕において認識し、〈神の放棄〉〔「裁き」〕をイエス・キリストの〈十字架〉〔「死」〕において認識することができる」。このように、「われわれが本当に神の啓示を認識する時、われわれは、初めて、神に対する人間的反抗、神の敵、神に相対して、自分の力を誇り、まさにそのことの中でこそ罪深い墮落した人間として自分自身を、またそのような人間の世を認識することができる」、換言すれば「生来人間は、神の恵みに敵対し、神の恵みによって生きようとしなが故に、このことこそ、第一に恵みが解放しなくてはならない人間の危急であったということ認識することができる」、またそれが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「神に敵対し神に服従しないわれわれ人間は、肉であって、それゆえ神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持っていないということ認識することができる」、またそれが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「自分が——つまり〔生来的な自然的な〕『自分の理性や力〔感性力、悟性力、意志力、想像力、自然を内面の原理とした禪的修行等々〕によっては』——全く信じることができない」ということを認識することができる（『教会教義学 神の言葉』、『福音と律法』、『カール・バルト著作集3』「神の恵みの選び」、『福音主義的神学入門』）。因みに、マルクスによれば、「宇宙の中での人間」は、次のような人間である——身体（肉体）と精神（意識）を介した普遍的で実践的な全自然（自然の一部としての自己身体、性としての他者身体、宇宙を含めた天然自然としての外界）との相互規定的な対象的活動を行う（このような肉体的身体的および精神的意識的な、人間の類的な活動や生活を行う）人間は自然の一部であり、「個々の世代〔労働、性（その共同性である家族）、言語〈活動〉による個体的自己の成果の世代的総和〕の継起」としての歴史（人類史、世界史）は自然史の一部である。このように、「歴史とは個々の世代〔個体的自己の成果の世代的総和〕の継起にほかならず、これら世代のいずれもがこれに先行するすべての世代からゆずられた〔経済的範疇の〕材料、資本、生産力〔、また性（その共同性である家族）、言語〕を利用〔媒介、反復〕する」、「私の立場は、経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとするものである」であって、決して個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとするものではない。個人は、主観的にはどんなに諸関係を超越していると考えていても、社会的には畢竟その造出物にほかならないものであるからである」、このような訳で「人類は人間のつくる観念と現実のすべての

成果（それが＜良きもの＞であれ、＜悪しきもの＞であれ）を、不可避免的に蓄積していくよりほかないものである」、それ故に「歴史的現存性とは、人類がそれらを人類的成果として歴史的に蓄積させてきたものの現存性のことである」、それ故に「個体としての人間は、そうした人類史的成果としての制度や社会を不可避に生きる以外にないのである」、それ故に「個人としての人間の意志、判断力、構想が通用するのはただ半分だけであって、いったんそうした現実と衝突してからは人は、何々させられる、何々せざるをえない、何々するほかないというように生きる以外にはない」し、そのようにして個の現存性（自己史、個体史）を刻んでいく以外にはない、それ故に「人間の歴史は、すべての個人としての＜人間＞が、或る日、＜人間＞はみな平等であることに目覚め、そういう倫理的規範にのっとって行為すれば、ユートピアが＜実現する＞という性質のものではないのである」（『経済学・哲学草稿』、『ドイツ・イデオロギー』、『資本論』「第1版の序文」および『どこに思想の根拠をおくか』「思想の基準をめぐって」）。フォイエルバッハによれば、「宇宙の中での人間」は、次のような人間である——「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は思惟する、すなわち……人間は自分自身と話をする。……人間は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たすことができる」、それ故に「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」、それ故にその時には「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」、それ故にその時には「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、それ故にその時には「（中略）神の啓示の内容は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神〔その人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」としての「存在者レベルでの神」〕から発生した……。 （中略） こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」（『キリスト教の本質』、『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」）、また「宇宙の中での人間」は、ただ単に理性的にだけ生きているだけでなく喜怒哀楽の感情の世界も、情念の世界も、嫉妬の世界も、いじめや嫌がらせの世界も生きている、また人間存在の総体性から言って個の世界だけでなく性の世界（その共同性としての家族の世界）や共同性の世界も生きている。

「しかし、そのことは、……詩篇の作者たちがそれから語った、……もろもろの天

は神の栄光をあらわし、地とそこにあるものとは＜神のもの＞であり、神はそのみ業の中で、大いなる方でいつくしみ深くいますという決定的な言明は、その主辞に関しても、その賓辞に関しても、〔人類史的、世界史的＜段階＞における〕バビロニアあるいはエジプトの手本からも、〔自然としての〕宇宙というテキストからも、そのまま読み出されたものではなく、それは、そのすべての形において、正しくもそのような文学的手本のテキストの中に、あるいは宇宙そのものというテキストの中に、＜読み入れられた＞ものであるという……事情を変えるものではない。「言うまでもなく、宇宙というテキストそのものは、何も語らない」——「詩篇一九・四で、はっきりと言葉に出して、〔宇宙は〕『話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに』、この日は言葉をかの日に伝え、この夜は知識をかの夜に告げる、と言われている」。このことと同じことが、傍系的な線（「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明）で問題となり得る「文学的な手本に関しても言い得る……」。「われわれは、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神、〕あなたの光によって光を見る」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神が、イスラエルの中で語り行動されるが故に、語り行動されることによって、宇宙の中での人間は、客観的に、……今やその現実存在の範囲全体の中で、〔「この神」の「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて、〕まさにこの神の力と栄光を認識することが許され承認しなければならないところの〔生来的な自然的な人間とは〕別な人間となる。それは、まさに＜この＞神の力と栄光である」。何故ならば、「人間がそこで神の知恵、力、いつくしみ、義として認識するすべてのことは、彼がまず第一に、イスラエルに対し働きかけ給うた神の語りと行動の中で認識した知識、力、いつくしみ、義の正確な映像以外の何ものでもないからである」。「ここでは、何の交差も起こっておらず、『主要な線』〔「主要な言明」、「『＜非＞自然』な神学」的な言明〕の上で宣べ伝えられたシナイとシオンの神以外の神のどのような特色も可視的となつてこず、〔その「主要な線」、「主要な言明」、「『＜非＞自然』な神学」的な言明が〕ただかしこにおいて内に向かつて見られ語られたことが外に向かつて繰り返されているだけである」。「それは、……〔「自己自身である神」としての「三位相互＜内在性＞」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における起源的な第一の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、すなわち父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）における、啓示者・言葉の語り手・創造者としての〕イスラエルの神、主からして、明らかである動きの中で、傍系的な線〔「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明〕の上でも、決して〔「主要な線」、「主要な言明」、「『＜非＞自然』な神学」的な言明の〕外からではなく、た

だ〔「主要な線」、「主要な言明」、「『<非>自然』な神学」的言明から〕<外に向かって>、したがって特に宇宙の中での人間を念頭に置いて、彼が〔「主要な線」、「主要な言明」、「『<非>自然』な神学」的言明の〕証人であることに注意を喚起しつつ、いやこの人間の〔「主要な線」、「主要な言明」、「『<非>自然』な神学」的言明の〕証言という形で、<もう一度語られるためである>」。